寒燈夜話

小栗外傳

三編 一

へ13
3919
13

門へ13
號3919
卷13

善戲謔兮不虐兮

絳山先生、編述、寒燈夜話、十五卷、書肆分為三帙、至此編、乞序辭於我、我熟思、先生之戲編、主勸懲、故以淇奥詩言、換序辭而已、

文化甲戌孟春　米花散人麗堂題

白京姫

結城持朝
老攫

一色詮秀
賊婦

常阿上人
横山安秀

書肆衆星閣予草廬より来る。曰く峰山先生所著の寒燈夜話。初編二編は既に
發兒〻〻世に行はる。茅三編刻既に成ぬ。二編ふる。長兄初編の要を摘て出し。
讀者の助とゐ。今世三編と。二編の要を抜抄〻〻人とふ其需道理あ
再び拙筆を走らすと左の如し。

照天姫。瀬戸橋より身を投げ。ワは折から。人買小四郎が舟ふさへら捲入水せざれど。
既に氣絶ゐ〻ぬ。小四郎き是石武の臣ゐるが。姫を見知りて捲び救保して蘇生。
其身の上を問ふ。姫は藤浪が毒惡に懲ゐ。実事を述べど。其時〻も小奇心
ゆゑ。人買来る。姫紙買りく去ぬ。其跡へ小次来。姫乃去向紙小四郎に問ふ。此時小四郎。
姫は主君ゐる。紙知。先非を悔。小奇より得〻身價を。小次よりく自殺せり。小次
兄に遺金とき。身價の金を首にかけ。六部〻〻て。姫は去向紙尋ゐ。さて照天は。小
ゐるがよりの。美濃国青墓の宿方長がりく入。遣渡さ捲。女〻ゐ。去紙固辞〻〻
とすり。千辛万苦とゆすうちに不図吏助重万長が許に来りける夜賊の為に其身奪ゐ〻〻。
途ふ〻〻く美登小太郎に救ゐ。三州二村山に忍びきり。小栗助重は前ふ二村山に忍びあり
〻〻。美濃は金生山虚空蔵より飛び折〻〻万長が女兒花兒悪漢ふせぐゐ〻〻捲雑〻ゐ及ぶ
を救ひ〻〻より。花兒ゐ懸恋せり〻〻捲。二村山ふ還ゐ〻紙得ど万長がりに居〻せ。さて万長照天姫二
村山に居ゐと知。其家長万平と申ゐ。集人とす。其當時美登小太郎と申ゐ。て兄に遺金と
りく姫乃身を贖ひ戻〻。其后照天小次小太郎の三人は美濃に忍び〻〻。小栗ゐ捲紙知て後ゐ姫
は許ふ来ゐ。花兒其跡を慕ひ来て。姫と争時万平忍び来て。彼是争。万平終に小太郎ゐ為ふ
殺ゐ捲ぬ。花兒は〻〻く恋死せり。其後小栗東国に下ゐ〻〻。箱根まで来りに。
花兒が怨霊のゐふ。熱湯の裡に落ゐ。乗馬鬼駲を殺。其身も湯傷〻〻支體を傷〻まで紙
記せり。是渾。勧懲と主やする物語ゐり。

禾花散人亂堂

小栗外傳三編目次

壹卷
第十八編　鬼ゐ出れく助重悪瘡を発き　雙ゐ逐れく照姫股肱を失ふ
同上　第十九編　千里ゐ車を牽て仏助を祈る　一朝ゐ病愈く神徒を仰ぐ

貳卷
第二十編　山鬼の魔術女児を誘ひ　老僧の念珠怪獣を走せ
同上　第廿一編　九傑遠慮良将を助く　二囊奇計妖攫を伏せ

三卷
第廿二編　宿を破寺に投じて山賊を殺す　途を草廬に索て両婦を得る
同上　第廿三編　壮夫郊示ゐ草賊を討　孝婦白屋ゐ美男を舎

四卷
第廿四編　勇威龍を走して元鏡を復す　仁恵士を憐く田宝を得る
同上　第廿五編　窮士発達して東国ゐ赴く　痴老懸愧して仏門ゐ入る

五卷
第廿六編　怨家を討く孝義を表す　佛堂を再建して因縁全し
通計九回

東都　絳山戲編

第十八編

鬼ゐ出て助重悪瘡を発き　雙ゐ逐れて照姫股肱を失ふ

程なく彼二人のうの間近くなるを仰ぎ看るゐ糸買川ゐ独し歩る体。妻の照天と郎党の小介あれば。愕然として驚くに。照天も小介も。相思ひ合ぎられることなれば。ハテ奈何とぞうり呆然たり。一盞茶頃互ゐ言語なく顔見合せ居るばかり。漸あって小栗助重云出る。ゐる不安妻も小介も今日ゐ今こゐすべ〜とおひきゃ。こゐく何等の故ようゐ只二人あて以来ゐ〜ゐ我ハ這般這般のうみ〜ゐ不図形を過失せりと昨夜妖怪ゐ逢て。今朝筑山ゐ出発く。温泉の池中へ鬼神を舎ゐ入れ熱湯のうめゐ馬を失ひ。ゐ人

爛腸して進退心のまゝならぬけるゝに至るまで。詳に物語まゐ。照天の姫も。小介も驚て嘆くとゝ。助重ぐ命差惜ぬ心をとり乱し。多く助侍しく さてやあう。数に列して后分を謹て音伝を侯く忍び伝りしに万長女児が死を嘆くのあまり。我こ沢伝とおりひ遂に在家を窺ひ知り。人数を伴ひ襲まゐりしに折ふ小介東國より帰り居りしが。小太郎の二人力をそして防ぐとゝ人ども。寡に衆に敵対ぐく。死力を尽し切ぬけて。辛ーく脱ーが。其所の絵に小太郎いふまゐりしや。去向知ぬ故ぎをく競かゝるに彼捜索人眼なく。仏ものあらで糸を川に生れば去忍ぶ方もなく再び万長に生命をいうる憂に遭んも知れ難ぐ殿の跡を慕ひ。本國に下る。見参して后鬼も角もせんとるあと俄に思ひ立くとるぐ伝りしに昨日三島の驛路にて茂沢寺に行上人に行遭まゐしに。上人の宣ふ。

昨夜紀音の告りに小栗助重万長が女児の怨霊のこもる箱根山に悩まされ不思議の事失を憑べし。明日此地方を照天姫ならびに彼を教て助重に救はるべしとありしほどに今朝より此所に待て居て伝て速に箱根山に往く救ひまゐと。上人の教まゐて取りのもとりあくと此所に来ぬ。えぐりしに教に差ぐ殿に見参まゐる伝ぬ。と語るを聞て小栗助重。上人の教今まとゝあど空ーくねと感じさてやあう。乳児いうるれば我をのこ怨みて。おんこゝが怨こざ伝。此るゆ上人の宣ーるまとより。やと向ぐされば。奴ぐの仕事の不審ゝれば。上人に向ーにそ汝ぶ肌の守る訳者の霊験。宛鬼威徳に怖ぢて近寄ぬ伝ぐ。又示ことあり助重毒湯に浸りしところ。悉く悪癩となり。昔の容貌なるべ。爾あれ熊野本宮なる温泉に汐治せば速に平愈して故に復をべ。あれ湯毒の所為なれば名湯の中湯

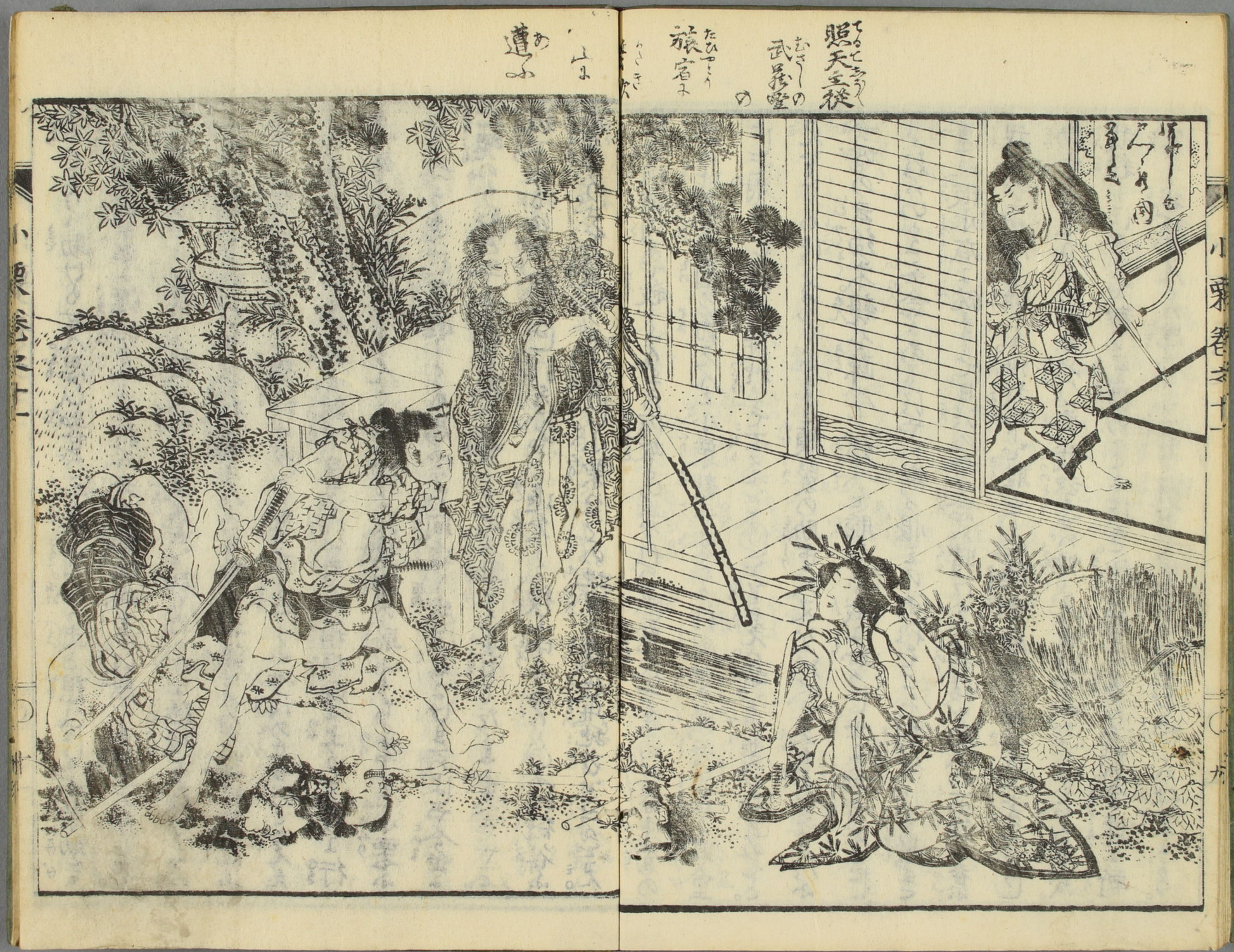
あく洗くぶ愈ごとい者と色とこれぐも示教一ゐ人ぶ足ゐ虫に紀伊山よ
却て人ゐ人と伊と人ゐ小栗判官流思く。上人の宜なとを乗んとこを畏こ
けれど仇河の為ゐるぐと此地方まですりしと我身い病気愈さんとて。
敬を後背ゆーゐろけくも。紀伊山を上てくんゐ孝子の道ゐあぐいやゐゐて
父君父の仇きめ天と共ゐ世ぐ兄弟の仇ゐ兵を還さぐといふことあて。
たとへ此身八十腸ゆて命を落ともも今ゐりし孫く濃一郎憲のおりゐん
ども恥ゐしと前ぐくもめくゐくゐ。再び流ん言治ゐく。爾ゐふぐおぼを
旨ゆゐ上常陸へ住ひをくさんといふゐ小栗ゐ甲斐さしく。小栗を背負ひ
前立てくへ家を出く小栗を休ー。馬やあると索ーにやうく疲ゐる馬乃
ありゐかを戈角ーて雇ひまゐことを小栗を助けゐ世。照天がとぐも
かへさーく常陸の國へと却きまり。

○箱根山ゐ毒湯ゐるゐを伊ゐぐられど都く温泉ゐ在地ゐを硫黄ゐり。
硫黄の氣ハきゐゐて毒ゐりゐ壮國那須野の殺生石ハ玉藻ゐ化ーて
狐となり狐の霊魂石とゐり人畜ゐとるといふことあり。是ハ爾ることゐ
ゐぶ灰那須毋ゐ温泉ゐて甚湯至ゐて熱ー。生邊の石ハ皆毒石
なりとこれをとりて殺生石のゐを考ふまバ。硫黄の氣強く。生辺の石ゐ
ふとぐり付く毒石とゐりしなるべ。けれバ石ゐとら毒石とゐるゐ生
水の毒ゐるぐふとやゐん高野山の毒ゐとりて思ひゐるべし。
同話休頭小栗助重ハ照天と小ゐ助られ忍びく武蔵國小ゐさし
ゐゐ代ごさ。かくゐね菊付助ゐまゐ病衰くに重ゐふなり。湯ゐ爛れ治ること。
賀れ破ゐて立てごゐゐも結ハ孫バ照天姫ハさくゐゐもいてど。小ゐもこもに
易て乞ゐくゐとある旅店ゐ宿ゐりて。治療をゐるゐゐ解ら孫どくゐ遣ゐの

鄙なれバさらぬだに醫師なく病ありかくしても急ぐ術ハ照天姫を心裡に置と
觀音の御告を乘ずるに故あらんと。いと浩しくハ想ひながら重る病に惱める
夫に諫ずてせバ仏を痛ましすかく病を守らるゝ仲人のなくあと晝夜患りけ
なく觀音に祈誓して病のおこたらん事を念じられ斯てある時一色詮秀
這回下総國にて正領恩賜ありしかバ一先領國に下りて土地の光景地理
の要害をも見んやと鏡念どの人々ゑあげ下總に赴かんとせしに俄に大家と
なりけるやどに從者不足にありしかバ蜜に横山を頼ミまゐらせの強盗等
を雇ひて從者の數を満しより横山安秀豫て詮秀に詣へバその身も
從者の中に加りやつしが今日此地方をとほるに午の貝ふく頃なりバ晝飯
せんとて小栗が宿りし旅店にも立よりて詮秀主從立入ぬ。鏡念殿の家臣
なれバ家主も言ふまでもなく此羅路の保正なれバ奔走して饗待けり。
横山安秀此時厠よりの帰らんと庭よりて前栽を浩ら入行しが離れてくれ
亭主人が悩める声の聞ゆるが不審げに小柴垣が伸上りてさし覗く當時
照天ハ茶の水を汲んとて障子を開き出る時にてありしが横山安秀と面を合
悍然より安秀豫て捜索ぬる照天姫を目前に見つけしにとにあるまじ
兎角の事を顧ずおどりかゝりてまさき捉へ恩を背きて不義に走る淫婦の白痴よ。
今捉へ往て世を去りし汝が両親なる光の夫婦に代りて庭訓せんといざりき
よと牽立る。照天姫は此年頃世を念と想ふ父の仇に逢ひて今斯ぞろとも。
すごすごさらはなれバ怒日頃に十分に豫て肌身を放さず懐刀抜て逆手
に持捉へ腕をとらひ袖ひ声を励まし云ふなれバ汝身ハ正しく母上の兄弟にて
ありながら云ふ應永七年の秋父上名武篤光を相模川にて非業にも失ひ
くさけのあらそひもせて奴家親子を知るまじと思ふるて敢えなくも其時父に

隨ひ下僕の道助が中を流り果せて主遂げ王の撲死をとりてゆくなり。生存命を取らしてを捕故郷を忍びが双家ぶの斬絶と伝へ愛をも後悔し父の撲死の光景を奴家より告んとおりひ多く行悲哀涙流る。忠義の信屈をやおんをが為ふ捉へられ彼鬼神ふ食ませんと繋がれ居り祈りたまの小栗ふ思食名ふあそ細ふ父の撲死を伝へおきその身ね秋の草枕ぬ白露と流ともに消へくもりゆく祇園の道伏ぶ流結びをと伝る叔父君父の仇を免さじ怒りの双受ます人と。おくる短刀実くれが試させと刃をかしもくも双刃ぶ放ち。膝下ふおまえ嘲笑ひ悪しと想へど今日まで仇を改めぶ我子の新婦ふせまやくやひ我をとりて仇と狙へぶ生おれば死く英原ふ行なふぶ今いふことを父おひく父と母とふ泣ぶ。汝が云ふ差ひおく鳥光こそふ家ふ

かけ。相撲川ふて殺しうそ何故といふなれば。應永七年の三春中旬の祇の北名武ぶ園の祇えんと小栗親子ふ対時池の鴛鴦と共ふ助重として射うしが時の運れ拙くて不覚をとる光が我と甲斐なきのこと。えをとめたくうくふまで額髪の助市ふ。又なれ人と姿ぶるとこ猪ふ女婿の云約束。親を疎んじ他人を睦ひく我ふ恥ひ世ふ嘲弄をさしうれいうる云命ふあふぶやふ斯ふ恨このあれどこそ相撲川ふ欺き連れ彼水底ふ沈まして。日ぶの世ふ念ふ晴けうう。其後名武の正須を奪我りのふせんと謀しふ汝我命を聴ぶして。遊会殿の内勅きを。学ぶりうし助手と走りうれ沙ふ思ひ発我望をぶ妨うう。それのみなくくぶ伝る光ぶ。我殺しうることを知り。是彼のことふはき。汝ふ恨こと多なれば。今速ふ斬害し。我腹いんとふ思へども。一年同ぎきるのあるふ。包まぶ流ぶ仕宜よう。


照天皇後
むさしの武蔵堅の
たひやうの藤宮よ
山ま
遭ふ

命ごろうに助けもせん。思ひ出ごと年前汝が夫と想ひたる小栗助重
不図も我家に漂泊するよりおれば。天の賜物此年迄悪しと思ふ人なるぞ。
討ちぞやと議りし。彼も此二く武蔵と知りねるを猛攻とおもならば。
人数を抜ぞるのみなるぞ。討漏さんともやと毒酒をとりて謀りしと思ふ
壺の差ひ違ひくも謀りしと。思ふてこゝふ此月の九日迄と考へ
ぞり。我管生のそのみる。部下どもを引具して箱根山に上りて。我に行
遭旅人あり。誰なるぞんと見たると死鬼駒の駒ふうち。家ふ小栗ふ
はぐふべうもなし。甚怪しくも思ふうち。間近く歩こするよりはるばるよや今世に
亡魂のうかれ生しよりとても。憎しと思ふ助重と着くたるふ変きやと。
近下どもに下知を色。討ちぞやと追欠しに彼山中にありといふ地獄谷ふ
逃失ぞり。さて只今見えぞり。小栗ハこての地獄に為。我此地方とるこえ。

恨ぞと云へるの為ふ。幽魂現生に生々ふよと思ひまぐもつ今日まぐも疑ひ
さふふ時中ぶ。汝さざるの助重の身のなる果へ知りたくふ。つまぐ語り
ぞ。紅と威しつ涯清しつ問ふ。照天姫ハ伝人に組敷まるふ世を念きる今
まぐ夫の身の上を問ぞるこの腹ぞしく。怒の涙に胸迫り。言らんも声
生ぞ。泣ぞり対れるぞ色。小かの照天が最前ぞ。こてふ不審此不彼不。
尋絵くて此所へ捜しまりてこてあるふいとうあしまを老人の照天姫と組
ちのて。言ぞり居ることるぞ。言語をもいぐど老人。樵山捉くぐくと投。
姫を助け牽起せば。照天ハ喜び起き上り。落せ。懐刀を上りく小ぞまを
高く褒ぞ。小かに好くも来ぞよ。今日不意樵山。出合ぞ。ぞ父の
仇ぞまくせ。ふ女子の。甲斐なれ力の及ぐまば。返り付ぞなりるんと。ふ延を
助けられ。再生されば仇人を討でやるんぞ。助太刀をと云ぞして樵山

目がけ進み来る。小かうこれを見て。雀躍して喜びつゝ。そもなる
元人が。彼横山まくまりの子なり。主君の敵脱さじと矛揺ひきるその際ゆ。
横山源内記重り。小かう勢ひかゝはをん我一人の力ゆを敵對かじと
思ひ。こゝゆ絨あり出舎と。声する中ゆ呼れば。横山が部下の老ども。
さゝゆもいそぎ一色の多勢一般よおーするゆぞ。小かう此雑こゝるよりも。
照天姫ようち對し宝山よ入ながら。彩妨の出るゆ。時至ふねとそこえ
ようの。屋の上よる失めゝぶ。悔く詮なれるゆれば一まづ此所を落らゆ。
某殿よ踏ぶまり。歩射敵を防ぐゆ。彼ら人と俗ひく。ゆ方へも脱れ
ゆ人。やとくと勧むれば。照天姫も大勢よ五義られてゆ中みくと返
討ゆやなりぬ。はしそれとも父の為。此矛いさゝゆ厭ふ。縁ど。大至の
ある夫の矛ゆ及んことを危ぶゆ。小かが海よ随ひつ。奥の方へぞ走入り。

程もあらせじと多勢の人数世所人走入れば。安秀小かを指さし彼を
名武が家子ゆて小かといふるりのぞ。ふー年よ我許を出奔したる
婿女が。方人をして尾彩ゆも。これをなる曲者ゆり。ゆれ討ゆと言語の
下心ゆ。うと一般よ得物くどうち振く脱をはしぞ取用り。小かが
一生懸命と腰刀を抜放ち。出向よ揮罵々ゆ。横山安秀怪ゆ。
汝昔限ゆ悪行ゆ世し故とりて。鎌倉殿の仰ゆ氣受所頃ゆ家も
失ひく。ようゆゆ矛を我ら君。縁者の好矛よ不仮をかけ。石恢ゆ
鴻恩を。亡却ゆして去年。相模ゆ出て人ゆれど。失ひやせ。不義非道。
と知くをしてゆりけるが。天ゆ白人をりて云ふ。ゆ偽りなく。
後よ姫君の知り合ゆ。束の間ゆ。捨変き雛形ゆ。孫ゆ娘の為矛ゆ
麦くの炬ゆ。こと重りて。今日の今まで徒くゆ年月ゆ。ひの日ゆの

孝公白王天の情こゝろひく不図も。今日汝ゐ生命ね。斯ごろ天の助あり。その加勢のれば。そていうで脱ゞこゝやゐめる。先非を悔くこゝろよく。此時刀を受よとて。斬ゝかゝるべ部下ども。隔りちゝく戦ふたり。赤羽小伝ハ武勇あり。且ゝ忠義ゐ分を捨ゝ必死よなりて働けば目さゝるちゐ五六人枕を並べく討ゝとり。此光景ゐ人ゝゐ。恐怖をみて近寄ゝ好ゞ。小伝もかゝくるを負ゝ。ゐ裡ゐ想ゐ。めざと敬ハ模山ハ。ゐ益の人ゞ殺さんとり。彼を一下太刀恨ゝんと。四方を望ゐ向ひる。廊堂の掾ゐひゝり。ある喜ゞ一敬ゐ走り寄んとする所ゐ。さゝる主を討せゞゝ。生級下ども。おゝ隅力をはゝして走ゝとり。小伝焦燥追ひちゞ。掾の辺ゐ追り寄り。主君の仇れ模山ゐ今ゝそ思ひ知とゐれと。太刀ゐり上ゝ切んとをいとも危ゝきゝ。かゝゐ。障子の裡より突然と。一条の姿ゐ現ゝり。小伝ゝ胸ゐ目ゞと立。

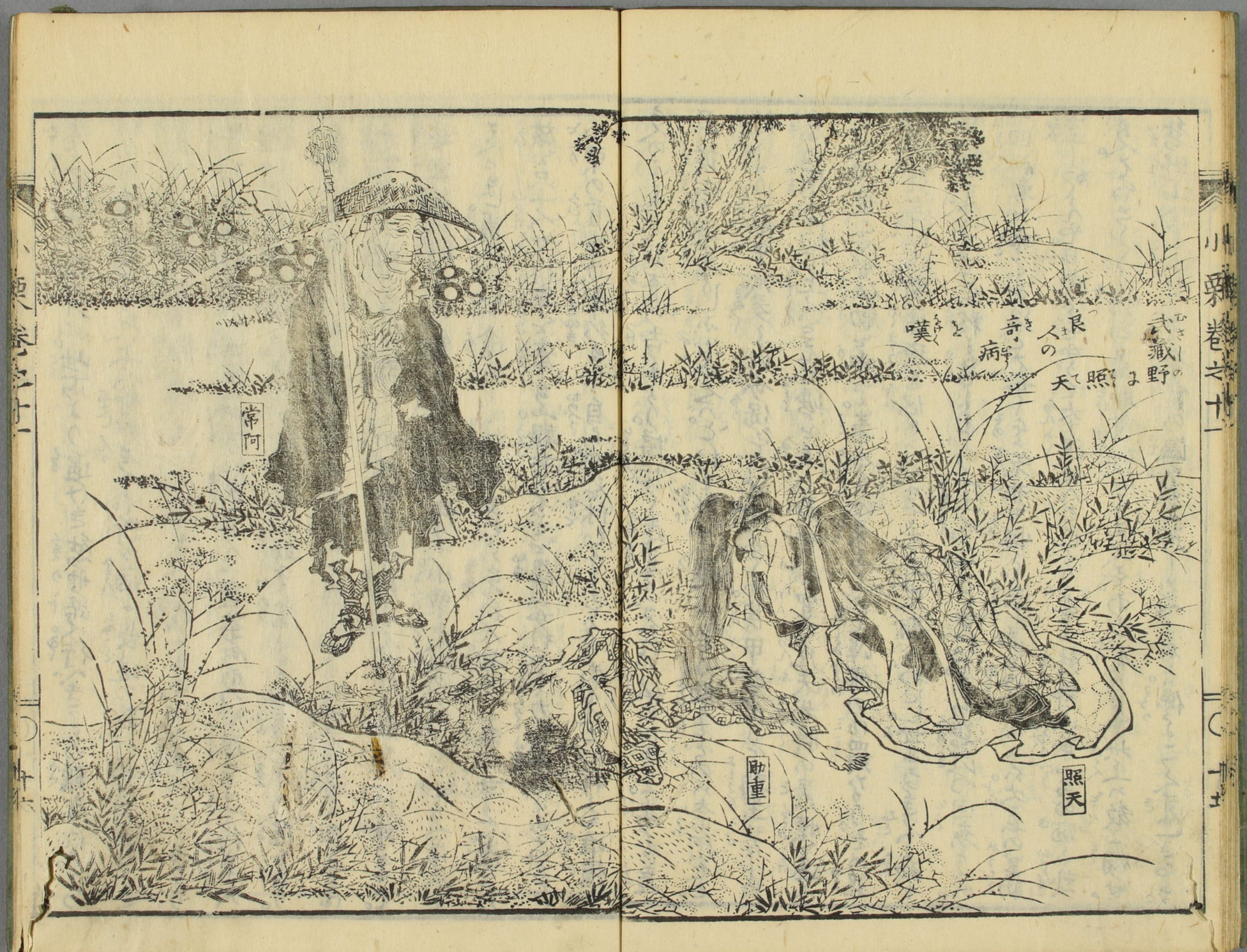
急所の痛ゐ。ゐ思ひの小伝。呼とのゝけゐ倒ゝり。嗚呼惜むべし。忠臣此一箭ゐ。めゝゐ。此所ゐ命を離せゝ。豈悼まゝるゐ非ずや。生射障子ゐ。さと開き。一色注秀ゆゝくと弓箭たゝきみゆゝぎ出云れね下郎の義勇ゞて。非業の死ゐ。做愚さゝとといと涙ゝゐらゝくゝ。安秀低頭平身。相公の一箭ゐ。あゝ。小臣ゝ命危ゝ。仁恵を垂ゝ。ゝの赤ゐ。恩を謝とれゝ最前ゝの光景を障子の衍ゐて粗ゝ。小伝ハ既ゐ射留たり。照天を早く縛ゝり。小栗ゝ生死を掬問あれと云ゐ安秀寛恕ゝ。走りゐ。いで追着て生捕んと。部下どもを引後て。照天ゝ跡を追ゝり。こゝゐ照天ハ。小伝ゝ流ゐ。夫助手を助けて馬ゐ。ゝ身自ら馬を牽。下総の方ゐ走ゝり。しゝ。名ゐ。おひゝゐ武義壮の。ゆけども秋ゝ果ゞゐと。古人ゐ限りなく。ゝ死ゐ流ゐ。嘆ゝて人家ゝ

さくらゐなく。旅行の人も少うれば。幽猛き丈夫も。幽細く悩はしく。照天姫は
我夫の重き病に悩むを。優恤つゝも辛じて。此ほまで脱れすゝうちも。
跡に殘せし小かごの。幽かくて鬼や角と。思ふも憂ふ行前の道に定
ゝふ弁慶が只幽をのこ苦しめねそれさへ。ゝるふ助さいと。主ゆ欲病忘よ。
みさゝぶひ〜身をりつて。遥々と道を馬上ゆく。急ぎしをだに今いとや。
此ほに至りて身も労れ。幽地死ねぶくなるまゝに。馬上よ塚ぐど道柴の。
上よかゞと歩ふ。照天姫慌忙周章つ。助け抱ひく懐中の女を合し
ゐをゞると。四方を顧れども。迷水の。水は絶くゝるしろぶ。こは奈何せんと
嘆つ。身の幸なきをうちかこち。幽裡に思ふ。夫は今かく病さまふ杖
とも頼し老僕を我くまぬを落さんと。殿ふ残りて大勢と只一人して防
なれば。死生のゐども斗られね。今日いとる悪日ぞ。邪ふ憂目ふ逢ことぞと。

流涙して嘆きしいとも慚ぢの光景なり。かゝる嘆のその所へ遥の殿より
大勢の襲ひ来るのことぞあれ。こゝく伽寺の人くと。顧望の方見しみ
樸山安秀大勢の部下どもを引俱して。襲ひ来れる光景。伽とも飛べきゝる
なく涙そゝろふ愕然と。前後不覚ふ。ゝ心をとり乱し。危急ふ迫て
雌しくも。斯く居らんに云甲斐なし。昔在五中ふ。女を捨て此野辺に逃げ
神冷くなりしふ。女ゞて追人の襲ひ来て。捜索されども草茂く。索ふ程に
此野辺を焼んとぞ。ゆとときその女〜武義野をけふるゆ女きて。音仲のはまの
こりまり我もこの山ゝと。慌ゝる。ゆ女て男を終ふたまりたり。かゝる例いある
なれど。ゝれいうきゝれ嫌ゝごと。ゐれゐ敵ふ襲ふく。九死のうちふ一生を得
こと難き災害の脱まねぞうもおりひ法く。肌れ守の観音ふ危難を助け
給られと。冊減こゝし祷りる。當時一人の老僧ぞ。鉦うちるゝ出まり。追人の

りのふ行對し何ごとをかん流涕す。衆臣沢く力なく。ひと手〜踏くたりどれぞ。
老傷ずして這初よりやよや夫婦の人々よ。今日の危難を遭ふこと〻佛の
教を乖ざく。ひと然野へ行ぞ。てくら辺ふ来ふしぞと云くるを笑らく
照天姫。ふり仰向きて見れば思ひもかけぬ茂沢の拉行上人なりしぞ。
且は驚き且はまことぶことの限なく。雪中の炭闇夜の燈火沢ることち
ちろ。嬉し涙で前ぞらぬ。ひれて拝首し。上人の示を乖き。東國よくぶ〻し
てこの畏れと足ふ深き故ありて。下総さして行んとし此辨らくに及ぶり。
然るを不図上人の助ふよりて脱ま沢れ。危難を此平ふ免まるり。そもく誰ち
告ずし。今日の樓難知らしも。此平ふ助て大意を無夫婦を再生さしま
ひ〻いと有ぞしと泣れかて感佩されば上人ぶち噴嚏つ云くりくるふ。弟ハ
佛の加護ありて一回ふぞ幾回故らせるふぞ。今日のあん身の

人のことも又観音の告ふより慌忙く走まり。これば仏の化告よ。実も差
そ樓山ぶ追来りしふ生命人ばこれを欺き還らしぶり。助をどのハ太平伝ぞと。
絶入りし助手ぶ。爰くに伏保されば御ふふ甚の甲斐ありて魂生花れ
息の間よりして上人を見て涙を流し。恩智を智の凡夫我慢の素懐を逐ん
とてぶと畏こくも仏勅と乖て。茅今日に及ぶと。是渾佛の化罰なり。その罪
いと脱ま沢ん。斯悪癩ふ悩ありぶとても再生期しがと。世ふ為きぶ人ぶ狂も
せが未来の罪ぶを報ま来ぶを。のふ上人と笑こゆれば。ち踏沢つ回意々人。
一回仏勅乖くと人ど。て〻〻先非を悔く。志乱を改ひ〻ふ大意の冥助
空しかくんや。日あくぶ安て本復せん。これより歩ま然野山本宮の湯ふ赴
ぶ〻ぞやさくと勧しふ助重涙せきあくぶ。あふ有ぞくや此上ハ教ま何せ。
然野山へ出山かして本宮の温泉よ浴しまぶ〻ふと僑ぶこと〻来ぶ。


常阿
助重
照天
武蔵の野
良人の
奇病
天照
嘆く

馬上なる塩を悩めば。世界より遥けき然世路を行べきことの難きをいとうち
かたらひたくこそ。上人嘆息考へ給ふ。斯る病を長途の旅行おぼつかなしと
宜ふ。道理形ばかり圓通の。覆流めるさまお我よまこと。一ッの術のえべきなり。
暫時こゝに待給へ。こゝ云さし何方に去給ふ。一盞茶飯あらで忍ちまゝ行車に
挽まゐり。夫婦に對ひ云へり。こゝよ助重をわ。こゝ形ば車の綱を引り。
乞兒のまゝにて行給へ。今小栗どの容貌を熟くこそ。痩瘁湯を煙とて
乞ふこゝを癒とるのて醜しく。彼地獄の罪絶くこそ。餓鬼の彷彿をて。
姿容貌の形そなり。変り果れば維あり。小栗夫婦の人くこそ。
そゞろに。爾うふに途ゆ。讎の害を免れん。扶ま姫の女こそ。遥々
旅を只一人せ行車を牽給ふ。艱苦のあるを思ひ。われ力をかんとあ
小栗の首にかけ。牽給ふ。自ら。労を休むよとゝもあらんこか。
准備や

ちゝろ人一國の木札とり出ッ。小栗の首にかけ。ちゝろ照天これとうに云ふ。
有因再生翁。名餓鬼阿弥。一回牽此車。供養千僧同。と。字字
とゝろ。照天を仏と猜。深く因縁謝しける。上人の恩の川を忘れ期や
佐くんあるとくも有ばこと。感涙の涙せきあへぬ。伏流こそ拜しる。
小栗もとりも感佩の涙袂をぬらす。彼許回り拝首。亦くも恩と謝しお
ゝ。そ附上人又曰さゝ。篤く謝しおもんを夫婦と貧道とゝさ。
因縁あれば。一回ゝと。再三回大慈大悲の観音の我おのこ仏勅ありて
故ハ。ゝ人佛恩こと莫大なれ冥助のほどをあひ。ゝ人慈悲ゝ
我ハ是より下總や常陸の方へ立越ゝ。彼所も忍ば十人の郎ゝも達。
もん三夫婦の光景より小栗が死亡の雑さゝ詳に告知し。亦ゝ然世人
赴し病平愈の所と待宿志を遂さしゝを。ゝ人を不忘

さ〜こゝもりむきちなり。

第十九編

千里わ車を牽て佛助を祈る
一朝ふ病愈く神徒を仰ぐ

且説小栗助重ハ阿上人の教よはしし熊野ふ行人となりたゝ。東海道
ハ悍るとも妻ゑれハ木芋路ハこそ登るあと助重をハ車ふ乗し照天姫も
形容ハ怒人外ハ百家衣をまとし破ふ一ハ面ハ蔽隠し全くもの
いでゝちゝくゆ行車牽たゝ。今日ちひろ旅衣木芋路をさして行空の
心の裡ともゆ悲なれ過世いるゝ作業ゆて幾許の憂ハ三芳村の里を旅発
道柴をふみくさと板橋をうち渡りたゝ行ゆでふ生来人の助まるとくゝ
不審ゝとこ去首ふかけるる木札を読さてハ拓行上人の助けるゝ原餓鬼ふ
こそさも因縁のありたゝゆいでや車ハ牽ゆて功徳も深き手徒し里那

あるゝんと旅人の手ひ牽ゆそ名やゝもふ木曾ハ岨道易ゝこ有る一筋ハ路
ふ入りふゝ此國の赤坂垂井関ゝ系を万長ハ家ふ近ゝれハ見ゝ怒られん
方ゝとさふ公躊躇もりゝゝ。三恵寺辺ふ止りて先景をうかゝひゝと。
然るゝふ此国あゝる丸ハ拓行上人近ハ一人の餓鬼をかけゝらゝと此行車ふ
うちゝ系ゝて然野の温泉ふ参らんとて此澤路をゝゝ。此車を牽く
りゝハ一回牽ハ千傍を供ふるとふ拘ゝきと書付ゝまへハ偽り名号と
牽ゝるとやいゝ程と人ゝ手ひ行ゆでふ万長ハ許の娼婦多ゝ街の
噂をうちゝゆて我々の罪障ハいゝふとるとも助ゝゝ程ゝ。彼餓鬼病の小車
を牽ハ少ゝき功徳ゆ。なりやとらんと語ゝひゝく。主の長ふ勢付の脈を
ひゝく打連ゝち三恵寺辺ふ出迎ゝ。とあゝる木陰ふ餓鬼病の車を休め居ると
ゝ。我こそ牽めと寄ゝ程なゝく車を牽行ハ脈ハ発ハ惑ハとも

術なくて公さあくで車ゐ添ひ行ぶ石どなく青墓の驛ゐもなれば公さや。
万長ゆえ咎られ身の大ごゆや及ぐんと。只顧圓通大菩薩のおん名称
唱てく怠なく。此西をさしまろれと。ゆよ祈念ゐけるぐ。仏の夏助や加りえん。
此歯付ゐ京都より鎌倉度へのは使長が浮宿りめくゐ。俄のゆゆて
慌忙き車を牽寄し。唱妓ゐも足うゐ別まと上げ。潭長が浮ゐ遷し
ぐ照天ゐ虎ゐを免れて安くも此西ゐ脱まんと。のそけど汗の垂井さへ
知ふで公の羅ケ原越けく行くや我夫の病をいつろ醒井と笑くゐ嬉しく
祥なれやゆゆて平愈あくうぐゐ敵の首ど多る井伊勇しき矢名ゐる宮
のかこもゐく後の永容貌。いぎ立よりてうんて往ん鏡山の月彩ゐ湖ゐふ
映ど皇りなれ父や男の忠信の信を君ゐ笑へあけ。遂ゐ者亡ひて明まるき
清代よあゆこの石山寺。大磯大悲の御誓ひ空くうどゐ助辛の枯木ゐ

仰くる身の病ひ愈さしまひ花咲る春に逢くまひ祝と。伏拝こつ跡ゐ
行けゐ京都もそやるろ。日ゐ呂井の伏見の里旅行人の呂きゐも淀の堤や
いとるれ秋の夜明く朝日影。さくも名るれ絵波洋のむしなくの稲
穂く。四天王寺ゐ拝音つ。牽ゐ車ゐ小車のきくらと峯の和田の糸八十畝
かけて清水ゐ海士の小舟の揖ゐ断。ゆりゐ身の上れ。よるゐさるゐ
旅枕ゐ涙の公のあれさ紙思ひ和泉の信田なる。森の楠千枝ゐうき。
物思ふる吉社。人も我とあらきなれ。憂世とうくみ葛の里。るく此西へ
紀の国や。和歌の浦波うち寄せて。芦間の霍も夫奴づれとるゐもそまゐ
似ぬれどもつろ夫ゐ身の病かころゐあまる涙とそ。潮干ひにこんね沖の石の
乾く隙さんるゐ旅の日数を移れゐ御くこと。行車牽けくも。然程の艱ゐ
苦ゐまる抑熊野権現くゐ。伊弉諾伊弉冊のるゐて。神ぐ帰れ

附うり。此比は無跡まし〳〵て。今は不朽の靈場なり。爾るに　本朝の諸神の中にて唯一と兩部の二つのり唯一と云へる。時きが伊勢皇太神のみ〻く。經を忌て僧尼を禁じ。渾く仏法を用ひざるこれを唯一不二の社と。又兩部こゝの〻を。本地の佛を設け儀〻常に法施をなす。僧尼奉仕傳まり。こゝに厩戸皇子佛法弘通しめふより以来我國の人仏を崇ちあがめふより。神と以ども国の習俗人の手向を受るべ。和光同塵まし〳〵垂跡の仏陀と云なりましね此年多くは弘法傳教の両大師。建立まふ所なり。此比神も多のこゝろうる。兩部の社となり。本宮證誠殿をりて弥陀と定め。新宮は千手の本社に至るまて夫くの本地あり。とふ聞らざれば足と載て且説照天姫を熊野まで着ゝれども女の身をりてとるべくと東の果より南海の熊野まで来ることふ。容易〻〻ね旅なりはる。病る夫を優恤の車と牽いて

まゐ〻ゝ不思議なも怪しきれ。足正〻〻熊野修現の權渡と。紀世音の冥助まて旅客照天の勞ふ代り車をゆけ牽ゝなり。爾ゝあり。こゝ〻ゝ身主なれば。千難苦辱ふべき方なく。身心ともふ労れ困ほふ。嶮岨なる湯の峯をるまで車とゆくべき道もなく。こゝいろまして上てんと。仏を怪〻徒ふ。山上に望みて行こうり。此當時は湯峯に登山すること。ゝ〻ゝ僧の五六人うち連〻。只今此所ゝ来かゝしが。小栗が容貌の怪〻なを。不安はくとち止まり。首ゝ掛ゝ来れを流。うち驚ひく照天に對ひ。此鐵鬼瘡と蓋沢なる。當所上人と因縁ありとおぼえてうひく。奈何るる人なりや。世〻類なき病うれと云へるとゆへ照天姫。いと方こくも哀〻〻。伏沈て嘆〻ゝ。かゝら涙をしてとめ。やはに傍よ見ハ東西方のりのまて。奴家うまゆてこゝるし。不図此悪き病を稟斯俄るしき貌ふなりね。常所上人ふ由緒をゝ

嘆きかせしに。上人嫌ことなし。これは熊野本宮の温泉に湯浴せんと思ふ
ことあるべしと。示しまうしてさるべき所へ使ひをつかはしたりけるもん山の
嶮岨なほ上るべき術なきれば如何せんと思ひ惑みてゐたる傍達のこの
地方へ人をつかはせるあるべき幸なりかかる嶮岨の山も車にてゆくべき道ありや教
させよ。とうち嘆きけるゆへこゆるぶ。衆僧情まこと僧にて法衣の袖を濡
せり。時分ありて其中の老僧進み出。衆僧を顧みて云此女性夫のゆゑ
身をなげ遠けき旅を思ふ。此所より程なく難所。いふ情まてゆくべきや。
其健気なる行人の此車を牽りのは其功徳を僧に供養
せんと同じきと書写ふ木れ。いざや人々此車を湯屋まひ或のやし
ゆへとやといふ衆僧皆ひつよ女性山を志まのいさぎよく。且は行上人
の出家のふこともあれば我く力をそへくく湯屋へ使ひまゐらせまうさんと。

或は綱を牽もあり。あるひは車をもとゐもありて。若くく山ふ出ぬ。その附
老僧はいとりて行は足をとりは道も嶮くく綱ぶ車にてゆくも易うなん先ゆくと
ある比寺に宿る人彼所に薬王山東光寺と号し奉るる湯の泡沫ゆく。
造りなほしさる薬師仏なり。昔より此山ふ湯浴をる者。東光寺のあるる
ふ新拵して。女性も爾ゆくとゆひつ僧元は
去ゆゑり。照天姫は喜びく此教ゆまし車を牽て東光寺ふ詣る。薬師
仏を伏拝。夫の病速ふ平愈ゆくんるを願ゆまし。それより湯屋へと
赴きし。助重長途の労れるやいと怪まれさ侍なれふ姫は疲る元側をこゆる。
岩間の下に車休ゆ。暫ゆいとうり居るうちゆ。もとうて元人々ゆ近じゆく
仏安堵しゆ。車を牽ゆ労れ我まゆくゆて。草を敷ゆ臥ゆもなれ枕のもと
白髪の老翁ゆ。善哉く照天姫汝女の身をもちて。かかる儀よ

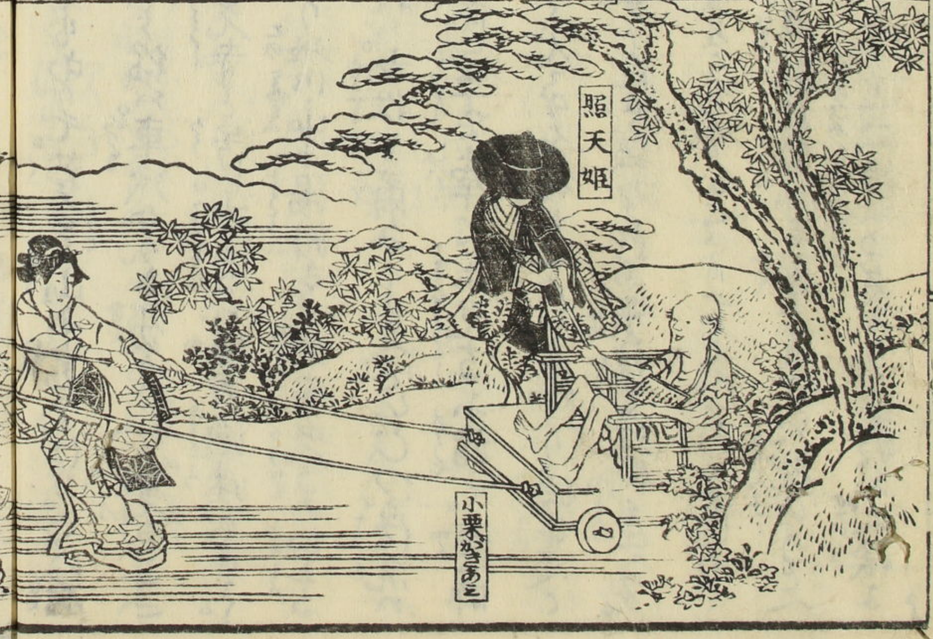
屋しもせで。山川海を越まうり夫の
ゆゑ苦身とる。彼し少なる貞節を忝
なくも擅況の渝ぶ赤心ぞ人民感象
あつて。助手ぐる病苦忽ち快き世人なる。
我をして神魂を生きしたまふ。助を
乎事足思孝の志手篤老るれば。
生積善の餘慶ゆて。沈痾忽ち
快然せんとく浴室ゆまるべし。

▲下へ

小栗餓鬼病と成て
熊野本宮の湯ゆ湯治
せんとして青墓の驛路を過
万長が家の娼妓ホ後世を助
らんと小栗ぐ乘ぶ空行車を
牽の圖

▲下のつゞき

時刻を移さず障碍もあらん。前刻ゆ
傍元助手ぐ車を助け牽うし。ゆ足
擅況の方便ぞと宣ふ声のみ耳そこホ。
響ハ峯の打風ゆ夏森の夏沈吟元
醒し。あり。翁の涙ハ人ぐ夫の側ホ
偶ゆうり。照天ハ睡醒ぐ后神勅の行
の有ぐ。信心膽ゆ沿ぐ。感去の
涙ゆ袂を沾し。此上ハ伽とう疑し伽ゆ



惑うんいざと云ひく小車の総を元くまに甲斐もなる女るぐるも合力の強きう
うるく丈夫も及ばぬ巌や松が根も厭りで車を牽れど。苦るく岩ふ攀
ぢうり。此地方い則足温泉の湧ゆて金佛の薬師あり。その彫像ふ十二の穴
あり。其穴より温泉湧出く。然病を治もるゆ万ふ一つも差ひ色。これ仏神
方便の至妙なり。照天い夫れうて抱き。苦師の彫軀より出る温泉と灌ぎ
かくれた不思議ゆ因ゆ爛身処疫と称り。膿汁流て臭氣を色しりしふ。
其癒悉く痂を結びく。臭氣失ふれば。姫その霊験の新なるを感じ。
捨死の神恩ゆ幽裡ふ謝しまくせ尚神力擁護を加くるくと祈念しく
怠慢なく。日ふ三回浴さとふ神明仏陀の奇特空しからず。幾日も
経ぎるふ病癒ると愈く。十日ふ満ぎてさしも醜りし疫愈て骨肉
昔ュ復し。原の小栗助重の壮るる身となりける。不思議とふも餘あり。

助重。さきらゆもいつぞ。照天の喜びたるなるぶ。足観世音の冥助と。
然野社現の神力と。且を常阿上人の道徳ふよりのくと。夫妻涙ともふ
然社三山ュ順礼。まる照天の守本尊れ観世音を拝しまくり。ゆるくまる
東国の方を伏拝み。常阿上人の恩を謝しね。ゆ后助重照天ふむりひ。ゆ
仏神の助ようて斯平愈を做といくど。ん身ゆ信の仏保ふく山ゆ祇え
川を渡ていと遠た武蔵よりしてそるぐと。紀伊国なる果ふ恙なくも
到ることるり。此恩いつる忘ぬべき。と懇ふ礼をのぶれば。姫礼を返しく
いふこゆ思ひもかけぬるゆ。夫人の妻としてゆ夫天とし仕ふること治と
かくねことぞ。されば夫の為としあくふ身を肉将ゆになることとても。いうぞう
厭ひ。ゆ長途の旅を孫るとゆいへど。仏神王法の三恩と殿の洪福ゆて。
幸ひふ恙なくことを得るれ。いつぞ奴家ゆ力ふ及ばんやとおのべ難苦をせし

こと式。此二も涛くぶ嫌りぷとなど毋り丹ゲ人々れ。助之妻のかしと武ーそ今ふ
そ。あぬ年ぶら。千辛万苦式。労とせね志気式猜を乱ふ。慚ふも慢恤。
感謝の涙ふ咽びまり。夫婦の間に袴あ乱ぷいともいみどき好迹なア。
斯て小栗助之。病まつく愈ーぐぶ。今ハくや一日も早く。宿志式とぎん
ことをおりへど。東國ふ居る郎儻ホ。且ー小を郎ぶ音問もなそれば。敵の中へ
夫婦のみ行ハて。思ふなくはそなれ年なれが。今ぶ〳〵人ーの勃静を待ん
とて。熊野山の麓ふかさぐりの家を営み。夫婦とれふ居りぬ。そのうちも
日毎権現ふ祈請し。神明の加護を祈りなア。
○前ふ熊野山の事式記さぐれふ。甚るの長々れば本文式漬の妨
なるぶ載ぐ。小栗霊湯ふて全快を乱ぶ一件。既ふ満備そまぐ今
幼童の為ふ茲ふ熊野権現の畧縁記を述く。神明の徳を知じむ。

こと。左のごと。

○熊野権現　牟婁郡社領千石　祭神三座　伊弉並冉尊　解
男神　速玉男神。　神武天皇五十八年ふ出現ーのふ。伊弉冊尊の
垂跡なりと云云。本宮ハ岩ふ神天皇の十六年ふ始て建立ーたまふ。
新宮ハ景行天皇五十九年建立あり。耶智ハ亀山院文應年中ふ
建立ーのふとぐ。是を熊野三所権現と崇ぶれり。　熊野権現
證誠殿　本地阿弥陀　両所権現　本地薬師　紀音　ふと式新宮ハ云。
若一王子　本地施無畏大士　飛龍権現　本地千手観音

○右四件ハ習合の説なり。
凡熊野権現の事ハ旧事記。古事記。日本紀纂疏。神名帳。その
雑書ふ記ととこ多。區区ふて一定ーがじ。諸説長文ふ亡く。容易

かゝふ為ごとゝ挙ゞ。退ひとく畏こくも其要を考ふるに和光の影仰げいよ〳〵高く。永世神徳を失ふ為ざほを述る而已。

○古　天子。熊野山へ御幸ありしは。平城天皇を始とし。花山院一度白川院五度堀河院一度鳥羽院八度後白川院三度代〳〵乃天皇さら。斯ゝる信はーませば。神徳の新なる措て知りなん。

小栗外傳卷之十一畢